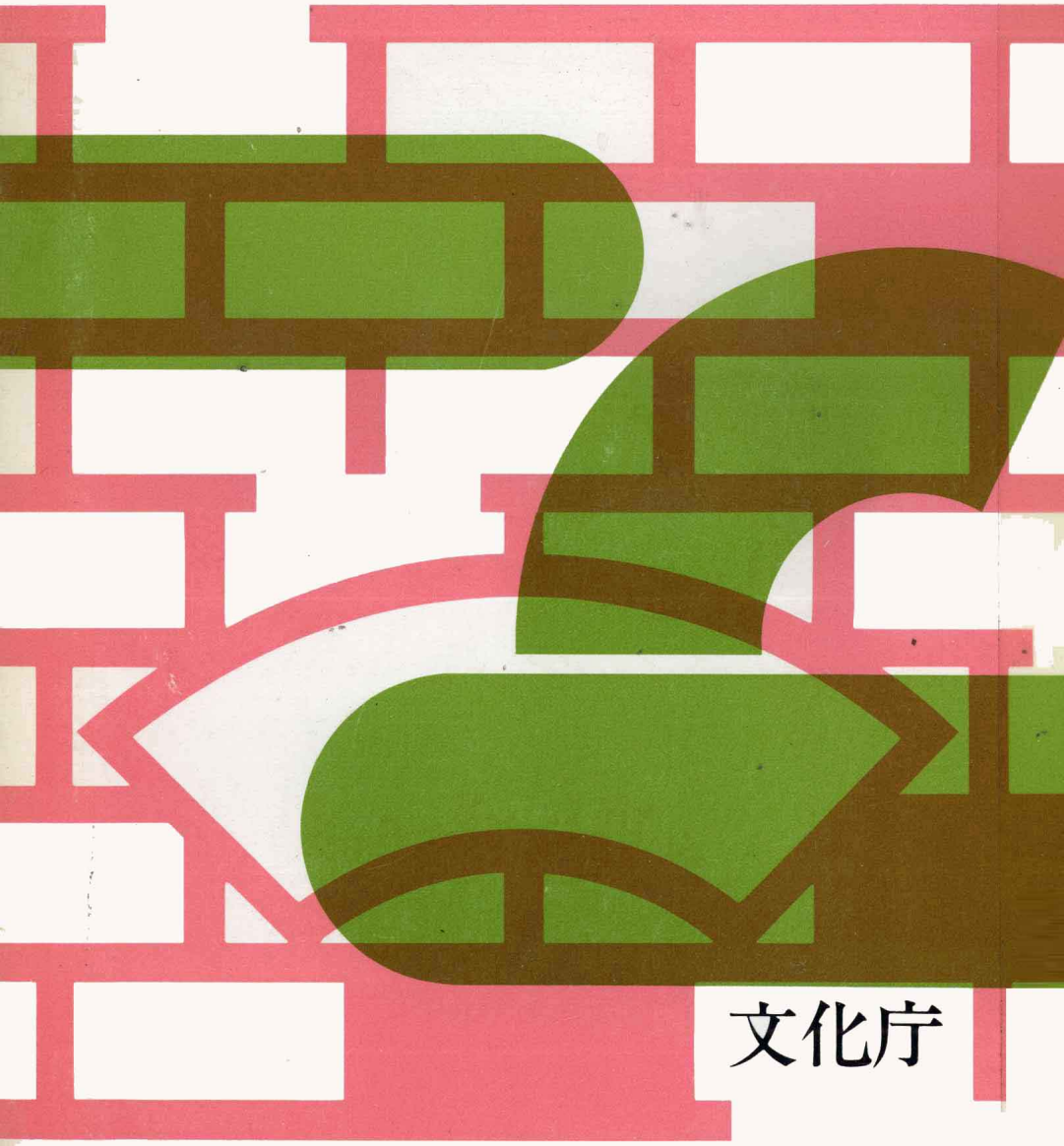
「ことば」シリーズ 12

話し言葉



文化庁

「ことば」シリーズ12

話　し　言　葉

昭和55年4月10日　発行　　定価 270円

編集　文　化　庁

発行　大蔵省印刷局
東京都港区虎ノ門二丁目2番4号
(03)(582) 4411

落丁，乱丁はおとりかえします。

「ことば」シリーズ　12

話し言葉

文　化　庁

前　書　き

文化庁では、昭和四十七年六月の国語審議会からの建議「国語の教育の振興について」に示されている「国語が平明で、的確で、美しく、豊かであることを望み、この際、国民全体が国語に対する意識を高め、国語を大切にする精神を養うことが極めて重要である」という趣旨に基づき、昭和四十八年度から「ことば」シリーズを作成し、これを各学校、各社会教育機関等に広く配布することにしています。

このシリーズでは、話し言葉、書き言葉を問わず、国民各層から広く関心の持たれている言葉に関する問題を取り上げ、その内容や言語生活における在り方について、専門家や学識経験者等により、分かりやすく解説などを加えていこうとするものであります。

本年度は「ことば」シリーズ12として、「話し言葉」を作成しました。この本では、我々が日常使用している日本語について、いろいろな角度から、その特色を取り上げてみました。企画委員会で構想を練り、内容や執筆分担について相談してまとめたもので、次の二つの部分から成り立っています。

一　総論を兼ねた、話し言葉をめぐっての座談会

二　問題になる点に関する解説五編

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この「ことば」シリーズは、国民の言語生活について、あるべき標準を示そうとするものではなく、我々が我々自身の言葉について考えたり、話し合ったりするきっかけとなり、参考となることをねらいとしているものであります。そうして、そのことを通じて、広く国民の間に国語に対する認識が深まり、国語を大切にする精神が高まっていくことにお役に立つこととなれば、誠に幸いと存じます。

昭和五十五年三月

文化庁文化部長

塩津有彦

企画、執筆等に御協力くださった方々

（五十音順、敬称略）

氏名	現職
江川　清	国立国語研究所言語行動研究部第二研究室長
大石初太郎	専修大学教授
川本茂雄	早稲田大学教授
黒野郷八郎	ＮＨＫ総合放送文化研究所長
寺島アキ子	放送作家
林　大	国立国語研究所長
林　四郎	筑波大学教授
水谷　修	国立国語研究所日本語センター日本語教育研修室長
森島久雄	文教大学教授
米田　武	ＮＨＫ総合放送文化研究所放送用語研究部長

なお、文化庁においては、主として次の者が本書の編集、作成に当たった。

室屋　晃	文化部国語課長
上岡国威	文化部国語課課長補佐
大木正義	文化部国語課国語調査官
木村秀次	文化部国語課国語調査官

目次

前書き

座談会

美しく豊かな話し言葉を求めて……8

水谷　修（司会）

川本　茂雄　黒野郷八郎

寺島アキ子　林　大

解説

一　話し言葉とは何か（大石　初太郎）……36

はじめに

第一　話すという行動

第二　話し言葉の音声

第三　話し言葉の用語

第四　話し言葉の構文・全体構成

おわりに

二　現代人の話し言葉（江川　清）……52

第一　言葉遣いについて

第二　ユレている言葉

第三　一日にどのくらい話すか
第四　話し言葉の文の特徴
三　話し言葉と行動（林　四郎）……63
第一　言語行動の入れ子構造
第二　言語と切り離せない表現手段
第三　言語とは別の表現手段
四　話し言葉と放送の言葉（米田　武）……72
第一　耳の言葉の建設
第二　戦後の社会状況と放送の言葉
第三　日常の言葉への接近
五　学校教育における話し言葉の指導（森島　久雄）……84
はじめに
第一　話し言葉の指導の場
第二　「聞くこと」の指導について
第三　「話すこと」の指導について
第四　話し言葉の指導の今後の問題

座　談　会

美しく豊かな話し言葉を求めて

<出席者>

川本茂雄
黒野郷八郎
寺島アキ子
林　大
水谷　修（司会）

（五十音順）

話し言葉の役割と教育の必要性

水谷　言葉の問題を、教育や生活との関連の中でとらえようとするときには、漢字や作文能力なども大切ですが、話し言葉の問題も避けて通るわけにはまいりません。話し言葉を重視せよという意見も最近は多く耳にするようになってきました。

今日は、四人の方においでいただいて、それぞれのお立場から、「美しく豊かな話し言葉を求めて」というテーマで、存分にお話合いをいただきたいと思います。

話し言葉の問題で先日友達と話し合ったんですが、彼は、「君、話し言葉なんてのは問題じゃないんだよ。書かれた言葉でなければ、教育も研究もできないだろう。話し言葉が大切だと言っていても、本音からそう思ってるんじゃない。」と、こう厳しいことを言うのがいるんです。今日は「美しく豊かな話し言葉を求めて」というテーマでお話しいただくわけですが、この「美しく豊かな」の内容についての問題もありますけれども、それ以前に、話し言葉が我々日本人にとって一体どういう意味を持っているか、どんな役割を我々のコミュニケーションの中で果たしているのか、というような問題を最初に取り上げて考えてみたいと思うんです。もしそれが大事でないとすれば、今日の座談会はやめてしまった方がいいということですから……。（笑）

寺島　アキ子氏

寺島　そんなことはないんじゃないんですか。だって言葉というのは、動作と一緒に、人間の一番基本的な表現方法ですからね。それでその人の人柄も分かるわけだし……。先ほどおっしゃったお友達のお話というのは、どうも少し功利的で、役に立つかどうかというようなことだけれど、話し言葉はもっと根源的なところの一つの重要な表現の要素であって、それがあるから試験に受かるとか出世するとか、そういう末梢的なことではなくて、やはり大変重要なことだと思います。

水谷　友達は「でもその証拠に、戦後、話し言葉の教育が教科書などに載っていたけれども、最近はやめてしまったではないか。」とか言うんですよ。

林　話し言葉というのは、教室で、どの教科でも行ってることなんだ、物理の授業でも数学の授業でも、話し言葉でやってるんだから、特に国語科の授業で話し言葉をやらなくても、全体で進めていけばいいことではないか、そういう意見があります。私は必ずしもそう思わないけれど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も、平生がすべて話し言葉でまかなわれているんだから、取り立てて話し言葉のために国語科の時間をつぶす必要はないだろうというような気分が、一方にないわけではない。

黒野 郷八郎氏

水谷 もし話し言葉が無意味だとすると、放送などは随分お困りになるのではないでしょうか。

黒野 放送のことは後で触れるといたしまして、一般企業でも、話し言葉の下手な人は、いまの世の中ではあまり出世しないんじゃないですかね。（笑）寺島先生もおっしゃったように、伝達の基本的な手段なわけで、議事録をまとめるとか、上司に対してある伺いを書くとかいう場合は、文章表現になりますから、その上手、下手というのは、かなり影響しますし、頭のよしあしまでそこで分かるわけです。話し言葉はそれと同じ、あるいはそれ以上の比率を持っていて、自分の意思を伝え、かつ相手を説得するという面では、非常に重要な役割を持っているわけです。話し言葉は社会生活の中では、いわゆる書き言葉と並んで、重要な要素を占めているにもかかわらず、その効果的な表現方法を自分のものにするという努力、訓練というものが行われていませんね、ここのところに問題があるんだろうと思います。教育においても忘れられております。

林 そうです。組織的にどういうふうに学習したらいいかということが固められていないんです。

川本 書き言葉は、印刷されるとか、手紙のように書いたものとしてとか、後まで残りますね。ですから後からいろいろ批評を受けたりすることがあるわけですけれども、話し言葉というのは、その場で消えてしまうわけです。だから、どさくさまぎれに、なんとか通じりゃいいというような、（笑）そういう安易なところがある。証拠の残らないものというのは、なかなかコントロールしにくいんじゃないかと思うんです。したがって、重要性は大であるにもかかわらず、今、黒野さんがおっしゃったように、方法的に取り上げられない、ということがあるんじゃないでしょうか。

水谷 今のお話ですと、話し言葉がもし軽視されているという見方をすれば、それは話し言葉自体のとらえにくさや、教育のような組織に乗っかっていないことによると見ていいわけですね。

川本 書き言葉に比べてみると、そういう特徴があるんじゃないかということです。

水谷 同じような問題は、外国の場合にもあるんでしょうか。

川本　私の見ているところは狭いんで、誤っているかもしれませんけれども、例えばアメリカなんかですと、書き言葉ができないという苦情を非常によく聞くんです。それでは話し言葉は満足するほどうまくいっているかというと、そうでもないので、アメリカの大学にはスピーチ・デパートメントというのがあるんです。この「スピーチ」をどう訳すかは問題で、テレビの脚本から放送まですべて含めておりますし、講演も入っており、個人の会話も入っておりますから、「スピーチ」というのには一体どのくらい入っているのか、限定するのは難しいんですけれども、要するに書き言葉でない言葉が中心になっている。そういうデパートメントがあるということは、やはりそうした研究が必要なんだということだと思うんです。ですから、外国の場合は話し言葉がうまくいって、書き言葉の方が問題だとは、そう簡単に言い切ることはできないと思います。でも、特にカレッジ、つまり専門教育にまだいかない一般教育の段階では、書き言葉ができないということをしばしば聞きます。

川本　茂雄氏

河岸（かし）を変えてヨーロッパ、といっても私が比較的によく知っているのはフランスですけれども、フランスは昔から古典教育が盛んなものですから、話し言葉も書き言葉も、意識的に訓練されているようです。それも学校と家庭と両方で訓練されているのではないかと思います。政治家なども、自分の社会的地位が上がるに従って、言葉の訓練を受けていく。地方出の方は標準語の発音を習うとか、演説のときにはどういう文の組立てをし、どのように息を切り、どのようにつないで、どのようなゼスチュアを交えたらいいかというような訓練を、意識的にするんだそうです。その意味で、少なくとも方法的な訓練が企てられていて、そういう訓練を施す機関がある、ということは言えると思います。

日本人の話し方は貧弱か

水谷　もしかすると俗説かも分かりませんが、よく、日本人の話し方は下手だ、と書かれているのを見かけるんですが、どうなんでしょう。日本人は話し方あるいは話し言葉が貧しいんでしょうか。

寺島　一つには、みんなが発言するという社会になってから、歴史が浅いわけでしょ、そうなったのは主に戦後ですから。それまでは、政治家とか特定の人は発言するけれど、庶民はなるべく黙っていようという世の中ですから

ね。大体、日本はしゃべるよりは沈黙をよしとする国で、子女に対する教育も、しゃべることを教えるどころか、なるべくしゃべらないようにという教育だったんじゃないでしょうか。それもあるような気がするんです。

水谷　修氏

水谷　さっき黒野さんから、会社などで話し言葉ができない人はちゃんと生きていけないというお話があったわけですが、みんなが矛盾を感じながら生きてるんでしょうか。つまり、一方では自分の頭の中にしゃべるのはよくないという思想を持ち、現実の場面ではしゃべらなければならないという悩みを持ちながら生活してるんでしょうか。

寺島　今はそんなことはないと思いますよ。今の若い人たちは、自分を表現しようと思うんだけれど、語彙などが貧しくて変な表現をしてしまうとか、舌っ足らずになってしまうとか、ということなんじゃないでしょうか。

川本　私、FM放送でよく音楽を聞くんですが、いわゆる軽音楽の解説をなさる方は、実に弁舌さわやかなんです。でも、言葉がリズムに乗り過ぎて、軽薄な感じがすることがあります。クラシックの方の解説を聞きますと、これが音楽をやってらっしゃる方かと思うような話し方をなさることがあるんですね。（笑）　お話自体が、リズムや、抑揚がなくて、だらだらとしていてね。しかし、私なんか音楽については素人ですから、内容的には教えていただくことがたくさんあるわけです。そこで、これは私の偏見かもしれませんけれども、日本人の話し言葉というのは、流暢（りゅうちょう）だと中味がなくなって、中味があると流暢でなくなるという傾向が強いんじゃないか。それが、いま黒野さんのおっしゃった会社での問題にもつながるのかな、と思ったんです。

黒野　会社での話し言葉といっても、具体的な場を考えると、幾つもありますね。上司のところへ行って一対一で説明をするという場合と、複数の人間の前で自分の意見を言い、かつそこで論戦をするというような場合と、いろいろありますね。その場合、実にうまい人もいるし、下手な人もいるんですが、ただ、いわゆる雄弁であるとか、標準語でしゃべるとかの必要もないし、流暢である必要もない。要するに、言いたいことをきちっとまとめて表現できるかどうか、だと思いますね。そしてそれは、文章と違いますから、二度、三度それをなぞり、若干の表現を変えて、相手に自分の意思を伝えるという、それだけの技術だと思うんです。ただし、それがみんなにできているかとい

うと、必ずしもそうではない。非常にうまいのもあるし、何を言ってるのか、何回聞いてもさっぱり分からないというのもある。それは実は、言葉以前の問題の場合がかなりありますね。例えば、仕事自体をよく把握しているかとか、自分の考えをきちっとまとめているかとかに関係します。しかし、いずれにせよ、話し言葉としての表現については、文章を書く場合ほどの努力が払われていないということは確かだと思いますね。

水谷　英会話の先生で、松本道弘さんという方が、「日本人の英語能力の不足、例えば会話ができないというのは、英語が流暢に話せるかどうかという以前に、日本語で的確に話せないことが原因している。そこから鍛え直さなきゃいけない。」ということを言っておられるんですけど、今のお話は、そういうこととも関連があるわけですね。

黒野　それは翻訳の方でもよく言われることじゃないですか。外国語ができるということではなくて、それ以前に日本語がどれだけ使えるかということの方が、むしろそれと同じほど必要なことだというお話は、よく伺いますね。

林　大氏

林　今のようなお話だと、ぼくは、もうなんにもしゃべれなくなるわけなんだけども、（笑）組み立てることができないんですよね。論理性といいますか――論理というとこむずかしくなるけれども、話を組み立てる、予測を立てて話をする、ということができない。自分で反省するんですけどね。大勢に向かって話すときには、特にそういうことが必要なんじゃないかと、私は思います。

水谷　先ほどの寺島先生のお話をお借りしますと、そういった論理的な組立てをするような習慣が、昔はなかった、必要性がなかった。それで……、ということなんでしょうか。

林　いや、なかったわけではないんでしょう。けれども、それは書き言葉の世界でだけ重視されていた、ということでしょうね。多くの人にとっては、話し言葉で発表する機会はない。議事堂へ行って発表するんなら、必要かもしれないけれども、それは非常に限られた人の問題である、というふうに考えられたんじゃないでしょうか。

ただ、明治の教育では、最初にやはり「話し方」というのがあるわけですね。読み方、綴り方、書き方、話し方といって、あったことはあったんですが、その「話し方」というのは、「私は誠に不敏なものではありまするが、これより桃太郎のお話をいたします。」というようなことなんです

ね。演説みたいなことを小学校一年生からやったんです。それではあんまりばかばかしかったものだから、段々なくなっちゃったんでしょうね。

話し言葉の本性と重要性の認識

川本　今、お話しの「桃太郎」だと、大体筋は決まってるわけですね。だけれども、話し言葉の本当の性質というのは、いわば臨場性、臨時性で、その場で、ある特定の人を相手に、何かの目的で発言する、ということにあると思うんです。ですから、相手がいるし、問題があるから、相手がすぐ分かってくれればそれで安心する、分からないと言えば、いろいろ言い直してみる。つまりフィードバックがあって、しょっちゅう自分が考えて、その場で論理の筋をつくり上げていくことができるし、つくり上げていかなければならないわけですね。もし話し方の教育がうまくいかなかったことがあるとすれば、臨場性、臨時性というものの取り上げ方がまずかったということもあるんじゃないかというのが、今、思いついたことの一つです。

第二には、「桃太郎」の話は筋があって世間で公認されているものなんですけれども、我々が本当に話すということは、自分の人格をかけての責任のある発言だと思うんです。責任のない発言というのは、ちっとも面白くない。なぜなら、import(重要性)、つまり中に(im)運ばれている(port)ものがないわけですから。

国際的な集まりで日本人が発言に立つと、そろそろ睡眠休息のお時間だといわれるのは、要するに公式的な発言しかなくて、その人の人格をかけたものが乏しいと感じさせてしまうからだと思います。

もう一度繰り返しますけど、臨場性と責任感という裏付けのない話し言葉はだめなんじゃないか、というのが私の考えです。

水谷　昔から話し言葉の指導というのは、標準話のガ行鼻音の訓練や発音のよしあしについての指導あるいはまた、丁寧な敬語の使い方といったふうで、文法的なレベルでとらえられたりしていたけれども、そうでなくて、もっと人間関係の中で、臨時的な場の中で、どう使っていくか、ということを問題にしなければいけないということになりますね。

川本　ええ。

林　それはもう根本的な基本的な問題だと思いますね。そこへはなかなかっこんでいけないでいる。ガ行鼻音とか敬語とか、言ったことは言ったけれども、それも徹底してはいない。表面的な所でも基本的な所でも、あんまりできていない、というような感じがしますね。

もう一つは、先ほどのお話のように、内容のないペラペラが世間に迎えられている向きも、ないわけではない。それに対する批判力がないですね。なんかで笑おうという構えをとってるもんだから、なんか一言言えば、そこで笑うことになってる、といったような話しぶりまであるんですね。内容がない。だから話す方も、上っ面な言葉を使ってしまう、自分のものになっていない言葉をパッと使っている、というようなことがあるんじゃないですかねえ……。

川本　そこで先ほど水谷さんのおっしゃった最初の問題に戻りますと、なるほど我々が学問なんかについて本当に正確な知識を得たのは、話し言葉じゃなくて、やはり書き言葉です。雑誌を読んだり、本を読んだり、論文を読んだり。その前に教室で先生に話し言葉で教えていただいたということはありますけれども、我々の正確な深い知識というのは、大体書き言葉から入っている。にもかかわらず、我々の現実の「生きる」ということは、話し言葉で行われているのであって、しかもそれがやがて書き言葉の基礎になっていくわけですから、話し言葉の教育あるいは訓練は意味がないというのは、私はそれは誇張ではないかという結論に達するんですよ。

水谷　日本語を話す我々日本人にとって、将来の日本の在り方というのを考えたとき、今おっしゃったような話し言葉の意義といいますか、重要性というのは、減ることはまずないように思うんですが、いかがでしょうか。

黒野　減ることはないんじゃないでしょうか。今、川本先生のおっしゃったことで尽きているんじゃないでしょうか。

川本　まあ、技術的な進歩がありますからね。ラジオ、テレビができたわけでしょう。電話もそのうちにテレビ電話なんてことになりますね。現在でも既に、手紙を書く人が少なくなって、電話をかける人が多いというわけですから、それだけを考えても、話し言葉が重要でなくなるということはないだろうと思います。どんなに複製が発達し、印刷が発達したって、我々の現実の生活というのは、話し言葉を基礎にして運用されていると思いますから、その意味でも、人間の「生きる」という形態が続く限り、重要性が少なくなるということはない、と私は思います。

林　日常のコミュニケーションというものは話し言葉であって、書き言葉はその補助でしかないわけですよ。テレビにもテロップは出ますけども、しかしあれは補助であって、やはりアナウンサーの話、講演者の話が中心なわけですよね。それを記録にとどめたりすることになると、書き言葉が大きな力を持つわけですから、両々相またなければならないんですが、リアルタイムの生活がなくなってしま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com